大坂島之内の街区構成について

近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究 その2

ON THE BLOCK PATTERN OF SIMANOUCHI AREA

A study on the town planning and the formation of Osaka Castle town Part 2

吉田高子*, 松口輝久**

Takako YOSHIDA and Teruhisa MATSUGUCHI

The purpose of this study is to analyze the pattern of the block size and clarify the distinction of the three districts, zoned by the difference of the development times, through the "Mizucho Ezu" in the Edo era. In the north Simanouchi, the inside measurement of the block was 40.5ken from south to north. On the centers, it was 44.5ken. In the south Simanouchi, the inside measurement was 42 ken. On the senters, it was 45ken. However, in the old Mittera village area, the inside measurement of the block and the wide of the front road were different from other districts.

Keywords : "Mizucho Ezu", Simanouchi area, old Mittera village area, block size
『水帳絵図』, 島之内, 旧三津寺村地区, 街区構成寸法

1. 序

前稿¹⁾では、安政三年(1856)の『水帳絵図』により、大坂島之内の町割・敷地割の復原図を作成し、島之内に特徴的に見られる町割方向、敷地割方向の転換が島之内各町の形成過程に関連することを示した。

つまり、長堀川開削以前における街区割と町割の復原を行い、清水町筋、九之助町筋までは船場から連続的に両側町を考慮した東西街路が開発されており、船場の領域がこのあたりにまで及んでいたことを示した。また、南北街路に沿った南北型町割の存在により、堺筋、心斎橋筋などの南北街路が他に先行して計画されており、さらに、道頓堀川開削に伴う東西方向の奥行20間の敷地割の町が道頓堀川に沿って成立していたことなどについても明らかにした。

本稿では、同じく安政三年の各町の『水帳絵図』により各敷地の間口・奥行寸法、街路幅、背割下水道幅などを取り出し、島之内の街区構成寸法について検討・復原

を試みた。

また、島之内は四周を堀川によって囲まれており、その堀川へ流れる町境背割下水道の配備が重要になっている。『水帳絵図』では各町の背割下水道の位置などについても図中に記されていることから、この下水道の配備状況も復原し、合わせて島之内の形成過程を考察する。

2. 島之内の街区構成寸法について

大坂の町割は従来から船場、島之内においては方40間の格子状町割を持つとされてきた。しかし、その40間とは奥行20間とされる敷地割から単純に割り出されたものであって、実際には『水帳絵図』で見えるように背割下水道幅を加えると、敷地奥行方向の街区内法寸法も40間にならないことは明らかである。

また、島之内については、佐古慶三氏が『水帳絵図』の記載により街区真々寸法方45間で計画されたのではないかと推論している²⁾。しかし、敷地奥行20間と考える

* 近畿大学理工学部建築学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Technology, Kinki Univ., Dr. Eng.

** 守口市役所都市整備部・工修

Dept. of Urban Arrangement, Moriguchi City Office, M. Eng.

と背割下水道幅0.5間を考慮しても街路幅は4.5間となり、『水帳絵図』記載の街路幅より相当広いものになり合致しないことになる。

また、明治期の『地籍地図』³⁾により、船場と島之内の街区の略面積を比較したところ、島之内と船場の中部・北部では街区面積に違いが生じていることがわかった⁴⁾。

このように、大坂の街区構成寸法については未だ充分には解明されていない点が多い。そこでまず島之内について、『水帳絵図』の寸法記載を詳細に分析・検討することにする。なお『水帳絵図』の各寸法は間、尺、寸、分で記載されている場合が多いが、寸法を合計するに当たってはそこで用いられたと考えられる1間を6尺5寸として換算した⁵⁾。また、島之内の街区構成寸法の検討範囲としては、地形上の乱れから東横堀川沿いの街区、西横堀川沿いの街区、道頓堀川沿いの街区については原

則として除外し、東西方向は箒屋筋(B筋)～佐野屋橋筋(L筋)間、南北方向は鰻谷通り(2筋)～三津寺筋(7筋)間を考えることにする。

(1) 街区内法寸法

各町の『水帳絵図』には、各敷地の間口寸法、奥行寸法、背割下水道幅(「町境除地水道幅」と記されている)、街路幅(「大道幅」と記されている)などがその形状とともに記入されている。これらの記載寸法により、街区構成寸法を求めることができるが、島之内では東西型町割と南北型町割が併存しているため、街区内法寸法は敷地間口合計、背割下水道幅とその両側の敷地奥行合計のいずれかで求めることになる。さらに、同一街区内で敷地割方向の転換が生じている場合には、敷地間口合計、背割下水道幅、敷地奥行を複合して算出する必要がある。そこで、次に街区内法寸法構成要因別に検討する

表-1 敷地間口合計による街区内法寸法分布

街区	内法	38間	39間	39.5間	～	40間	～	40.5間	～	41間	～	41.5間	～	42間	～	42.5間	～	43間	～	43.5間	～	街区数合計
東西	(a) (b)			2		2	2	3		2	2	2	4	12	2	4	1		1	1	1	(a) 28 東西計 (b) 16 44街区
南北	(a) (b)	2	2		1	2	1		2	2		6	2	8	2	8	1	1	1	1	2	(a) 32 南北計 (b) 12 44街区
街区数合計		2 街区	2 街区	2 街区	1 街区	4 街区	3 街区	3 街区	5 街区	4 街区	2 街区	8 街区	6 街区	20 街区	4 街区	12 街区	2 街区	1 街区	2 街区	2 街区	3 街区	(a) 60 (b) 28 合計 88 街区

注) (a) 敷地間口合計が半間単位の数値となるもの (b) 敷地間口合計が半間単位でなく端数のあるもの

図-1 間口方向街区寸法

(単位: 間・尺・寸・分)

ことにする。

① 敷地間口合計

図-1は『水帳絵図』の敷地間口を街区ごとに合計したものである。これによると、その敷地間口合計寸法は半間単位の値となるものが多いことがわかる。

それは表-1でも示したように、東西方向では44街区中28街区、南北方向でも44街区中32街区、合計88街区中60街区で約7割が半間単位の値となり、街区内部寸法に計画性の高いことが予想される。

表-1は間口合計による街区内部寸法を、方向別にその寸法集中度を見たものである。

東西方向街区内部寸法は42間が12街区と最も多いが、これを含む40間以上42.5間以下の範囲に44街区中38街区が広く存在している。南北方向街区内部寸法については38間から最大44間4尺4寸まで寸法が広がっているが、42間と42.5間がいずれも8街区で、全44街区中26街区が41.5間以上42.5間以下に集中している。

また、東西・南北を合わせた88街区についても、街区内部寸法42間が20街区と最も多く、次いで42.5間が12街区、41.5間が8街区と続き、全体の約6割を占める50街区が41.5間以上42.5間以下の範囲にあることがわかる。

② 敷地奥行寸法と背割下水道幅

敷地奥行寸法は図-2のように、その方向にかかわらず20間が最も多く、20間とまらない所を挙げると21間6ヶ所、19.5間5ヶ所、21.5間4ヶ所、その他、22間3ヶ所、19間と20.5間各2ヶ所、23.5間1ヶ所となつて

いるが、この20間以外の所も半間ごとの規則性のある値となっており敷地奥行寸法に計画の意図があったことは確かである。

20間以外の敷地奥行寸法をもつ区域の内、中橋筋と心斎橋筋の間で清水町筋以南の区域では町割方向の転換が敷地奥行寸法に影響を与えたと考えられるが、ここは道頓堀川裏につながる所でもある。また、心斎橋以西で周防町筋と三津寺筋に挟まれた旧三津寺村領域に当たる所

表-2 背割下水道幅 ①東西行き下水道

(単位: 尺)													
下水道位置(南北方向)	H-I	I-I	I-J	J-I	I-B	B-C	C-F	F-E	E-D	D-C	C-B	B-A	H-A 平均
緑谷通～九之助町筋間	2.0/3.5	3.0/2.0		2.5	2.5	4.0/2.5	3.0/3.2	3.0/3.5	3.2	3.2	3.0	3.0	2尺9寸4分
九之助町筋～清水町筋間		3.5	3.5	4.8	4.3	4.0	3.5	2.2/3.0		3.0	3.1	2.0	3尺3寸5分
清水町筋～周防町筋間		4.0	4.0		3.0	2.5	2.5	2.0					3尺
周防町筋～八幡筋間			3.3	1.0									2尺1寸5分
八幡筋～三津寺筋間	5.1		3.2										4尺1寸5分
三津寺筋～道頓堀川筋間	3.2	3.0	3.0				3.0	3.3		3.0/2.0	2.0/1.5	3.0/2.0	2尺6寸4分

②南北行き下水道

(単位: 尺)													
位置(東西方向)	西ノ橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間	心斎橋筋～心斎橋筋間
2-3	4.0		1.2			4.0	1.3						
3-4	4.0	2.0/1.2	2.7/1.5			4.0	2.2/1.3	3.0/3.7	4.0	4.7	1.0		
4-5	4.0	2.5	2.8	3.9	3.6	2.0	3.0/3.8	3.0/3.5	5.0/5.3	4.57			
5-6	4.2	2.0/3.0	3.4/3.2	2.5	2.4	2.9/3.0	3.0	3.0	4.8	4.0/4.57	4.0		
6-7	5.0	3.1/2.0	3.6	3.5	2.5	2.8/2.9	2.1/2.8	3.0/3.6	4.0/4.1	4.0	4.0		
7-8	4.8/7.0	3.0	2.6/3.2	2.5	3.5	2.8	2.3/2.8	3.0	4.0	4.0	4.0		
2-8 平均	4尺7寸1分	2尺2寸	2尺6寸8分	3尺1寸	3尺	3尺5寸5分	2尺4寸6分	3尺2寸2分	4尺4寸5分	4尺3寸	4尺6寸2分

図-2 街区別敷地奥行寸法

(単位: 間・尺・寸・分)

側に1間拡げて4間幅と考えると、

鰻谷通り街路幅4間+街区内法40.5間+街路幅4間+
街区内法40.5間=89間

となり、長堀川開削前の2街区(南北1街区真々寸法44.5間として)を復原できる。つまり、長堀川開削以前には、鰻谷通りは両側町の通りとして4間幅であったと考えることができる。

このように、島之内においては敷地正面街路幅4間、側面街路幅3間を基本とするが、周防町以南の心斎橋筋と中橋筋に挟まれた区域では周防町以北の街路幅(敷地側面街路で3間)を南下させた形で、敷地正面街路と変わるにもかかわらず3間幅である。また、心斎橋筋より西の区域では、心斎橋筋以东の敷地側面街路幅(3間)を西へ伸ばした形で、正面街路幅を3間とした街区割がなされている⁸⁾。

3. 町規模による旧三津寺村の町地転換状況

三津寺村については、中世末期から近世初頭にかけて既に成立していたとされているが⁹⁾、三津寺村領域の農地が、屋敷地に変換され大坂城下町へ編入するのは元和六年(1620)ごろとされている。この三津寺村農地の屋敷地への変換については、内田九州男氏・伊藤毅氏らの研究がある¹⁰⁾。

内田氏は旧三津寺村の農地について、「この地域の古町名の研究及び町界と、その前身の村の究明等が十分にすすんでおらない現状」で、図化するのは困難としながらも「三津寺村の範囲、すなわち元和五、六年に市街地化した地域の範囲を大雑把にでも把握したいため」として、旧三津寺村農地分布推定図を示している。

伊藤氏は『御津宮文書』慶長十四年(1609)の「摂州欠郡三津寺村御検地帳」により、三津寺村推定構成図を示している。また、三津寺村農地から屋敷地への変換については、元和六年(1620)の「三津寺畠やしきニ成申候帳」に記された町名や川名の新旧を照合させることによってその範囲を推定している。

具体的には、矢内氏による大坂三郷新旧町名比較の表¹¹⁾をそのまま用いた形で、鰻谷片町は松原町を比定しており、西ノ鰻谷町と東ノ鰻谷町は片側町の尾上町と高間町に比定している。内田氏の農地分布推定図もこれに拠っており、鰻谷通りの旧三津寺村農地は西横堀川から東横堀川まで東西に長く延びていた形としている。

本稿では、島之内の寸法構成を念頭において、同じ『御津宮文書』¹²⁾を用いて屋敷地への変換、つまり町地転換状況を次のように検討した。

元和六年「三津寺畠やしきニ成申候帳」の記載より、旧三津寺村農地から町地への変換状況を町別面積で捉えると、表-3のように考えることができる。つまり、島

之内の一街区面積(1ブロックとする)を平均的な42間×40間(下水道幅を除いた街区内法寸法)=1680歩(5.6反)として¹³⁾町別の町地転換面積をブロック数に換算した。

次に、『水帳絵図』で判明する編入先の町の面積をブロック数で捉え、町地に変換・編入した時点での面積と比較照合した。また、編入後の町名との照合と町地への転換状況については次の通りに考察した。

鰻谷片町(おなきたニかた町)については、「鰻谷通りの片町」と考えられるところから、清水町筋の松原町とするのでは不自然であり、条件に該当する同規模の鰻谷通りの高間町(『初發言上候帳面写』¹⁴⁾)によると古名は鰻谷七丁目であった)であると考えた。西の鰻谷町(にしノおなきたニ町)と東の鰻谷町(ひがしノおなきたニ町)は、「かた町」としていないところから、長堀川開削前のように両側町であったと考えられる。両側町として名残は鰻谷通りの長堀十丁目に見られ、北側長堀十丁目に加え南側にもその一部が存在する。これに鰻谷通り北側長堀平右衛門町と南側尾上町を合わせた町を

表-3 旧三津寺村農地の町地変換規模

①「三津寺畠やしきニ成申候帳」(元和6年)			②水帳絵図(安政3年)			三津寺村転換後の面積①/②
町名	面積	町規模換算	町名	町規模換算		
勘四郎町	1反0畝0.4歩 8・2・26	計 1.66 70+	南島四郎町 (船場堀城内)	2.07+		83.0%
(ふしみ川)	1町4・7・17	2.63	(長堀川)			
おなきたニかた町	6・9・28	1.25	高間町	1.25	100.0	
にしノおなきたニ町 ひがしノおなきたニ町	1・1・0・18 5・7・00	計 2.985	長堀十丁目・長堀平 右衛門町・尾上町	計 3.0	99.5	
かき屋町	2・9・00	0.51	錦屋町	1.5	34.0	
すおう屋 せきた町	2・8・00 1・1・2・11	計 2.50	周防町	2.5	100.0	
もんめん町	1・1・0・27	1.98	南毛織町	2.5	79.2	
三津寺町	1・1・7・20	2.10	三津寺町	2.5	84.0	
よこ川うらわて	2・7・02	0.74	炭屋町	4.0	18.5	
道とん川うら町 道とん川うら町	4・3・23 8・7・27	計 2.35	道堀堀久左衛門町	2.5	94.0	
(道とん川) (道とん川)	1・8・1・10 7・0・14	計 4.50	(道堀堀)			
たゞみや町	1・1・14	0.20	南島屋町	1.5	13.3

図-4 旧三津寺村の町地転換街区

考えると、約3ブロックとなる。これは東西の鰻谷町を合わせたものと同規模となることから、心斎橋筋以西に両側町の東西鰻谷町が形成され、それが長堀十丁目、長堀平右衛門町、尾上町となったと考えられる。

周防町、南毛綿町、三津寺町、道頓堀久左衛門町などについては、三津寺村から町地への転換地の面積が、その後の町面積における占有率が80から100%と大きく、元和六年町地転換の際に大坂城下町へ編入された新形成の町とすることができる。

鰻屋町、南豊屋町では、三津寺村よりの転換地の編入町における占有率が少なく(鰻屋町34%、南豊屋町13.3%)、旧三津寺村農地として既存の町内に混在していたものが、町地に転換したと推測できる。

「よこ川ノうわて」については町名の記載がなく、炭屋町へ編入したとされるが明確ではない。

大宝寺町、松原町、柳町については元和六年「三津寺畠やしき二成申候帳」に相当する町名が記されていない。しかし、大宝寺町には文祿二年(1593)霊誉上人により開かれた大宝寺が存在していたとされており、『御津宮文書』中の「慶長拾四年九月吉日 攝州欠郡三津寺村御検地帳」(伊藤氏は検地帳Aとしている)にも、「大ほうやしき」「てらやしき」として合計1544歩(町規模に換算すると約1街区分の0.9ブロックに相当する)の面積が記されている。この大宝寺は元和初年の寺院及び墓地の移転統合¹⁵⁾により、生玉寺町に移されたが、跡地は「大宝寺町」の名を残し、九之助町筋(大宝寺町筋ともいう)に面する2ブロックの両側町として城下町に編入された。

大宝寺町の南に位置する松原町と柳町は、清水町筋の両側町である。町成立時期は確定し難いが、街区は清水町筋が西方に伸びた形で形成され、大宝寺町と同時期には成立していたと考えられる。

4. 街区構成寸法の復原

島之内では、東西型町割と南北型町割が混在しているため、街区構成寸法は街区内の敷地割形態や街区の位置によって非常に複雑になる。そこで、方向別に代表的街区の取り出し、街区構成寸法を捉えることにした。

(1) 東西方向

図-5は、東西方向に街区構成寸法を整理復原したものである。

① 鰻谷通り～九之助町筋間の東西型町割の街区

ここでの街区真々寸法は、東の箒屋筋～浪花橋筋までの東西4街区合計180間、浪花橋筋～西の井池筋までの東西3街区合計135間で、1街区の東西真々寸法平均45間、内法寸法42間となる。

しかし、浪花橋筋～板屋橋筋までの間に街路幅5間の堺筋が通るため、東西3街区の真々寸法は45.5間、内法寸法41.5間で計画されたと考えられる。

心斎橋筋以西の街区東西真々寸法は、佐野屋橋筋～御堂筋43間、御堂筋～心斎橋筋47間と大きく異なるが平均すると45間となる。また、井池筋～佐野屋橋筋の東西3街区合計は136間となるが、ここに正面街路となる幅4間の心斎橋筋が通るため、内法寸法は平均42間となる。

② 周防町筋～八幡筋間の街区

ここは南北型町割が多く、東西方向は敷地奥行より算出される街区寸法をとることになる。それは、中橋筋との交点を境に東では敷地奥行寸法20間、街区内法寸法40.5間で、街区真々寸法は、正面街路幅4間を加えた44.5間となる。これは、①の鰻谷通りの1街区真々寸法に比べ0.5間縮小していることになる。

また、浪花筋から井池筋までの東西3街区の合計は、①の鰻谷通りの135間に制約を受けたようで、周防町筋でも135間となっている。しかし、ここでは街区は等分割されず浪花筋～中橋筋間と三休橋筋～井池筋間は街区東西真々寸法44.5間であるが、中橋筋～三休橋筋間では46間である。

図-5 街区構成寸法の復原(東西方向)

図-6 街区構成寸法の復原(南北方向)

心斎橋筋以西は東西型町割の街区であるが、街区東西内法寸法は42間に揃っており、周防町の町地転換の際に整備されたことを窺わせる。しかし、街区東西真々寸法は4間幅の心斎橋筋の影響を受け、心斎橋筋～御堂筋間は45.5間、御堂筋～佐野屋橋筋間は45間となっている。

また、佐野屋橋筋の位置は中橋筋から西へ226間の位置にある。これは、街区東西真々寸法45間の4街区に46間の街区（4間幅の心斎橋を含む街区）を加えて得られる寸法であり、既存の心斎橋筋を考慮した上で中橋筋の位置から計画的に採った寸法ではないかと思われる。

（2）南北方向

南北方向は区域に分けて検討する。

① 九之助町筋、清水町筋以北の東西型町割区域

街区南北内法寸法40.5間（敷地奥行20間×2 + 背割下水道幅 0.5間）+ 街路幅 4間（南北敷地正面 4間街路半幅×2）= 街区南北真々寸法44.5間とみることができる。

② 九之助町筋、清水町筋南側の町割方向転換街区

街区南北内法寸法は、敷地奥行（北側敷地）20間+背割下水道幅 0.5間+間口合計（南側敷地）21間=41.5間と算出される。

これに敷地正面街路である北側街路半幅の2間（4間×1/2）と側面街路となる南側街路半幅の1.5間（3間×1/2）の合計3.5間を加え、街区南北真々寸法は45間となる。

③ 九之助町筋、清水町筋以南の南北型町割区域

図-6は板屋橋筋、堺筋、心斎橋筋、佐野屋橋筋について筋別に南北街区構成寸法を見たものである。

板屋橋筋の南北型町割3街区（但し清水町筋～三津寺筋間）の南北真々寸法は45.5間となっている。

堺筋では南北4街区（但し九之助町筋～三津寺筋間）の南北真々寸法は、平均45間となっており、内法42間と側面街路幅3間による規則的な街区構成寸法を持つことで、他に先行して堺筋が設けられたと考えることができる。また、心斎橋筋では周防町筋～八幡筋間の南北真々寸法は45間であるが、八幡筋～三津寺筋間では41間と小さくなっている。

以上の清水町筋～三津寺筋間南北3街区真々寸法合計を筋別に見ると、板屋橋筋136.5間、堺筋135間、心斎橋筋130.5間と東から西に向かうほど狭くなる傾向を持っている。これは、島之内の地形の歪みと開発時期の違いに影響されたものと考えられる。

④ 佐野屋橋筋の東西型町割区域

ここは旧三津寺村領域に相当する箇所であり、清水町筋以南についても東西型町割となっている。この内、周防町筋以北は南北内法寸法40.5間、正面街路幅4間、南北真々寸法44.5間と整い、街区割成立時期の早いことを暗示しているのに比べ、周防町筋以南は南北内法寸法43.

5間、39間などと揃わず、正面街路幅も3間と狭く街区南北寸法に乱れが見られる。

（3）街区構成寸法による地区分け

以上、方向別に検討した街区構成寸法は、次のような島之内の地区分けと街区形成過程を考えることができる。

① 船場より連続する東西型町割の地区

九之助町筋と清水町筋以北についての東西型町割の地区は、長堀川開削以前には船場より連続して町割が形成されていたと考えられる地区である。

この地区の南北方向街区真々寸法は、街区内法寸法40.5間（奥行20間×2 + 背割下水道幅 0.5間による）+ 正面街路幅4間=44.5間となる。

東西方向街区真々寸法は、街区内法寸法42間+側面街路3間=45間で、堺筋（5間幅）に影響された浪花橋筋以東では、街区内法寸法41.5間、街区東西真々寸法45.5間となっている。このような街区構成寸法は長堀川開削前の寸法を引き継いだと考えられ、島之内成立以前からのこの地区の存在を裏付けることができる。

② 南北型町割の地区

南北型町割が成立している九之助町筋と清水町筋以南の地区については、街区南北真々寸法は45間とみることができる。しかし、街区東西真々寸法については、中橋筋を境に東と西で異なっている。

中橋筋以東の地区について、街区東西真々寸法は、街区東西内法寸法40.5間（敷地奥行20間×2 + 背割下水道幅 0.5間による）+ 正面街路幅4間=44.5間と基本的な寸法を採用して寸法が決定されていることから、船場より連続する堺筋を南北方向の軸に成立したと考えられる。

中橋筋以西の地区については敷地奥行寸法20～22間、正面街路幅3～4間、街区東西真々寸法44.5間～46間と安定していない。このような構成寸法の乱れは、この地区の成立の遅れを示すものと思われる。

③ 心斎橋以西の東西型町割の地区

周防町以南のこの地区において、街区東西真々寸法は東西内法寸法42間+側面街路幅3間=45間であり、南北方向は正面街路幅が3間と狭く敷地奥行寸法も19間～23.5間と揃わずで街区南北真々寸法も安定しない。つまり、島之内における街区構成寸法の基本とも言える敷地奥行寸法20間と正面街路幅4間を共に採用していない。このように旧三津寺村領域の開発の遅れが街区構成寸法の乱れに現れている。

5. 下水道の排水経路と復原

島之内の下水道は、そのほとんどが町境に配備された「背割下水道」で、明治二七年(1894)に至るまで開渠形式であった¹⁰⁾。また、街路の両側または片側に設けら

れた側溝形式下水道は「大道幅三間一尺、側溝一尺、側溝九寸」などと記されている。この開渠形式の背割下水道や側溝が、街路を横断する場合には「石橋」（下水道の石蓋）が設けられており、これは、島之内の範囲で合計60余りに及んでいる。

暗渠形式は「大道埋込水道」などと記されているが、これは下水が合流し堀川に流れ込む所に限られていることから、背割下水道や側溝から暗渠に流す排水形式としていたことがわかる。

図-7は安政三年の『水帳絵図』から当時の下水道設備状況を復原したものである。排水の方向は『水帳絵図』には記されていないが、現状の下水道の水流方向¹⁶⁾を参考、照合し推定した¹⁷⁾。

これによると、島之内の下水道は排水経路によって相互につながらない区域に分かれていたことがわかる。

第一に、心斎橋以東の九之助町筋、清水町筋以北では東西に背割下水道が通り、東横堀川、長堀川の二方へ合流排水されている。この区域では、東横堀川に排水されていたものが長堀川開削後に長堀川方向へも流れ込むようにされたと推定される。

第二に、心斎橋以東の九之助町筋、清水町筋以南は南北に背割下水道が通るが、これらは合流し東横堀川に排水される区域と、暗渠を通して道頓堀川へ排水する区域に分けることができ、それぞれ独立した排水経路を成立させている。前者は早くから東横堀川に排水することが可能であったが、後者については道頓堀開削後に成立し

たと考えられる。

第三に、心斎橋筋以西では東西に背割下水道が通るが、炭屋町境を走る南北下水道に合流南下し、南端で西横堀川へ暗渠で排水される。この区域は、旧三津寺村領域に関連するところでもある。

このように、排水経路で分割される各区域は、町割方向の違いとも関連するが街区構成寸法の違いによる地区分けとも重なることがわかる。

6. 小結

以上、安政三年『水帳絵図』により島之内の街区構成寸法を整理・分析し、その復原寸法を中心に島之内の街区形成過程を考察した。

まず、街区区画法寸法については、間口合計による内法寸法は41.5間、42間、42.5間に集中して求められた。奥行方向による内法寸法は敷地奥行20間が基本となり、これに背割下水道幅0.5間を加えた40.5間が基本となっていることが知られた。また、街路幅は敷地正面街路幅4間、側面街路幅3間としていることが判明した。

島之内全域の街区構成寸法は、これらを基本にしながらも九之助町筋と清水町筋を南限とした町割方向の転換により非常に複雑なものとなっている。そこで方向別に街区構成寸法を分析したところ、地区別に構成寸法の違いが見られ、それは各地区の成立時期の違いに対応するものであることが考えられた。

図-7 下水道設備と排水経路の復原

第1の地区は、船場より連続して開発された東西型町割の地区であり、街区南北真々寸法44.5間（街区内法寸法40.5間+正面街路幅4間）で揃った寸法を持っている。

第2の地区は、南北型町割の地区で、街区南北真々寸法は45間（街区内法寸法42間+側面街路幅3間）であるが、街区東西寸法の違いにより中橋筋を境にさらに2つの地区に分割でき、東では東西寸法44.5間（内法40.5間+正面街路幅4間）と整っているが、中橋筋以西では寸法は安定せず、中橋筋以西地区の成立時期の遅れが推定された。

第3の地区は、心斎橋筋以西、周防町筋以南の地区で奥行方向の街区内法寸法40.5間、正面街路幅4間を共に崩しており、旧三津寺村領域の開発時期の遅れが街区構成寸法の違いと乱れに現れていることが判明した。

以上の地区分けは下水道排水経路別にもほぼ一致することがわかった。

また、今後この安政三年「水帳絵図」で得られた寸法構成を現状寸法と照合することによって、「水帳絵図」残存数の少ない船場の街区構成復原寸法を得ることが可能と考えられる。この復原寸法により大坂城下町船場の町形成過程を解明することが本論の意図するところであるが、それについては次稿に譲る。

注

- 1) 吉田高子、松口輝久：大坂島之内の町割と敷地割構成について（近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究 その1）、日本建築学会計画系論文報告集No454, p. 165～172, 1993. 12
- 2) 佐古慶三：大坂昔時の地割を論ず、建築と社会、第19輯7号、1936
- 3) 吉江集画地籍地区編輯部編：市街及接統郡部大坂地籍地図、1911
- 4) 松口輝久、吉田高子：『地籍地図』による船場と島之内の町割について、日本建築学会大会学術講演梗概集、1992. 8
- 5) 「表口裏行之間数ハ六尺五寸杖、坪詰反畝歩者六尺杖」（『藤井善八覺書』貞享五辰年の項：大阪市史 第五巻所収、1911
- 6) 一般に大坂においては、東西方向の「通り」が4間（船場では敷地正面街路となる）、南北方向の「筋」が3間（船場では敷地側面街路となる）と言われている（宮本雅明「初期大坂の都市空間と都市デザイン」「まちに住まうー大阪都市住宅史ー」1989年 平凡社 その他）。しかし、町割方向がその南半部で転換する島之内において「通り」と「筋」の区別は余りなく、街路幅の違いはその方向でなく、敷地正面街路幅を4間、側面街路幅を3間とすることを基準としている。
- 7) 吉田高子、松口輝久：大坂島之内の町割と敷地割構成について（近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究 その1）の図ー3長堀川開削前街区割復原図と安政3年の長堀次郎兵衛町では鰻谷通り街路幅を3間とし、南北1街区真々寸法を45間と想定したため、塩町筋街路幅5間と復原に無理が生じていた。
- 8) 伊藤毅氏は「近世大坂成立史論」（生活史研究所、1989）の中で、「三津寺村の城下町編入計画はまず全体の水路網が設定され、水路によって囲まれた領域を町の領域とし、しかるのちに道路が割り付けられたことを想像させる。」として三津寺町や炭屋町の例を挙げているが、街路、下水道、街区計画が別々に進化したとは考えがたい。
- 9) 「近世大坂成立史論」（前出）
- 10) 藤井富太郎氏は「み津」（みつ誌編集委員会 昭和43年）の中で、『御津宮文書』を用いて、元和2、3年(1616, 7)の三津寺村の範囲を現在の地名に置き換えて示している。また、同文書に三津寺村の田地が召し上げられ町屋敷になった旨が記され、三津寺町も元和6年には三津寺村から分割されて成立したことを明らかにしている。
内田九州男氏は、三津寺村農地の町地転換について、「三、三津寺村農地の市街地化」の中で、『御津宮文書』元和6年の「三津寺島やしき二成申候帳」により論考がなされている。（『大坂三郷ー市街地の形成を中心として』、大阪の歴史、第7号、1982
伊藤毅氏は、三津寺村農地の町地転換について、「第三節（一）三津寺村と新たな町々」において、『御津宮文書』（元和6年の「三津寺島やしき二成申候帳」、2種の慶長14年の「摂州欠郡三津寺村御検地帳」、元和元年の「摂州欠郡三津寺村御検地帳うつし」）の記載を詳細に分析することにより、三津寺村と近世初頭における島之内についての論考がなされている。（『近世大坂成立史論』、生活史研究所、1987）
- 11) 矢内 昭：「大坂三郷の形成過程」、大阪の歴史、第9号、1983)
- 12) 『御津八幡宮・三津家文書（下）ー近世初期大坂関係史料ー』（大阪市史料第十八輯、大阪市史編纂所、1986）他
 1. 慶長拾四年九月吉日の「摂州欠郡三津寺村御検地帳」（伊藤氏は検地帳A）
 2. 同検地帳（伊藤氏は検地帳Bとして区別）
 3. 元和元年九月吉日の「摂州欠郡三津寺村御検地帳うつし」（検地帳）
 4. 元和六年十一月廿八日の「三津寺島やしき二成申候帳」
- 13) この5.6反は1ブロックを1町とする木挽町南之丁の面積の1680坪（5.6反）に見られるものである。「三拾町組坪高年番定帳」（大阪市立中央図書館蔵）による。内田九州男氏が「都市建設と町の開発」（『日本都市史入門 II 町』）のなかで表示している。
- 14) 大阪市史第五巻 所収、1911
- 15) 「大坂濫觴書一件」：大阪市史第五巻 所収、1911
- 16) 明治二七年近代下水事業に伴い、溝床のコンクリートを打ちU字型とし、開渠であったのを石蓋で暗渠化した。（大阪市水道局：大阪の下水道No26、1985. 9）
- 17) 安政三年の下水道の位置にはいずれも現在も下水道が通っていることが確認できる。（大阪市水道局：下水道配備図、1987）
- 18) 吉田高子、松口輝久：『水帳絵図』による島之内の下水道の復原について、日本建築学会大会学術講演梗概集、1993. 9（1994年3月8日原稿受理、1994年8月25日採用決定）